

報 告

第56回日本薬学会関東支部大会を開催して

原 俊太郎

第56回日本薬学会関東支部大会実行委員長

平成24年10月13日、本学旗の台キャンパスにて、第56回日本薬学会関東支部大会が開催された。本大会は日本薬学会関東支部に所属する薬学部・薬科大学(現在は23校)が毎年持ち回りで開催するもので、本学における開催は平成10年以来14年ぶりとなる。本会は6年制薬学教育制度のもと最初の卒業生を輩出してから最初の関東支部大会である。メインテーマを「未来の薬学」とし、研究・教育だけでなく、薬剤師の今後の専門的な職域拡大についても含め、「未来の薬学」に関する熱い議論、討論の場となればと考え企画した。

大会当日は晴天に恵まれ、9時30分の開始時間前には多くの参加者に来校いただいた(写真1)。午前中は、例年のスケジュールに従い、2号館および4号館の計9会場で、口頭発表による一般講

演が行われた。これまで多くの薬系大学で研究活動を支えてきた大学院修士課程の大学院生が平成23年度より激減し、本支部大会でも一般講演の応募が大きく減少することを危惧していたが、口頭発表のみで120件の応募があり、各会場ではとても熱い討論がかわされた。会場によっては立ち見になってしまったところもあったようだ。本学の学生も、学部5年生を中心に16名が口頭発表を行った。最近の学会ではポスター発表がメインであり、学部生や大学院生が口頭発表する機会は大変少なくなってきた。今後も、支部大会が、大学院生のみならず、6年制を含む学部学生の口頭発表の場として活用されることを期待している。

大日本住友製薬、田辺三菱製薬、エービー・サ



写真1 大会受付



写真2 シンポジウム会場にて

イエックスの3社にご共催いただいたランチョンセミナーをはさみ、午後の部の初めには、東京大学大学院医学系研究科教授の浦野泰照先生に、「スマート蛍光プローブの精密開発による新たな細胞・疾患イメージング」というタイトルで、上條講堂にて特別講演を行っていただいた。浦野先生は「未来の薬学」を担う研究者のおひとりで、先生のご研究は特にがんなどの疾患の新たな診断法への応用が期待されている。浦野先生は、いつもながらの軽妙なトークで、とてもわかりやすく最近の研究成果について講演してくださった。

さらに、シンポジウムとしては、幅広い薬学の関係者の方々に参加していただきたく、「日本から発信するがん化学療法」、「地域で築く医療ネットワーク」、「6年制薬学における基礎研究のあり方」の3つを企画した(写真2)。シンポジウム1「日本から発信するがん化学療法」では、本学の宮坂貞名誉教授にオーバービューしていただいた後、宮坂先生が開発されたイリノテカンに加え、日本発の抗がん剤、S-1およびエリブリンについて、開発に携わった先生方に開発の歴史を中心にお話

いただいた。シンポジウム2「地域で築く医療ネットワーク」では、本学病院薬剤部の峯村純子先生をはじめ、地域医療でご活躍されている先生方に、地域における医療ネットワークに関する話題を提供していただいた。本シンポジウムでは、さらに、薬学部6年生の市村丈典君、宇都宮佳子さん、歯学部6年生の石原央記君に、アドバンスチーム医療実習の経験談を語ってもらった。シンポジウム3「6年制薬学における基礎研究のあり方」では、近畿大学の松山賢治先生に「基礎薬学と臨床のブリッジング」についてご講演いただいたあと、東京薬科大学、昭和薬科大学、帝京大学、東邦大学という6年制のみの大学で研究を進められている先生方に、6年制における基礎研究の現状・展望・問題点についてお話いただいた。いずれの会場においても、「未来の薬学」を見据え、多くの討論がなされ、予定の講演時間をオーバーしてしまったくらいだった。

また、シンポジウムと並行し、関東支部大会では恒例となった“平成24年度日本薬学会関東支部奨励賞受賞講演”ならびに“第5回日本薬学会関東



写真3 16号館・ポスター会場にて

支部若手シンポジウム”も行われた。今回の奨励賞受賞者は、星薬科大学の五十嵐信智先生、帝京大学の田畑英嗣先生、北里大学の松尾由理先生の3名である。また、若手シンポジウムは「未来の薬学を担う若手研究者」と題して4人の新進気鋭の若手研究者(武田薬品の岡田健吾先生、高崎健康福祉大学の田中祐司先生、東京大学の松沢厚先生、さらに本学の山口智広先生にご講演いただいた。

シンポジウムの終了時間にあわせ、16時から、16号館にて、一般講演ポスター発表が行われた(写真3)。本大会企画のポイントの1つは、新しく建てられた16号館におけるポスター発表である。企画の段階で、ポスター会場をどこにするかは大変頭を悩ませる問題であった。実習室での発表では今ひとつ学会の雰囲気が出ない上、学内のポスター発表で時折使用する7号館は懇親会の会場としなくてはならない。支部大会前日、多くの学生ならび若手教員の方々にも手伝っていただき、16号館の3階教室ならびに1階ロビーに、ポスターボードを設置し、ポスター会場とした。明るい陽光が取り込まれ、自画自賛かもしれないが、

当初の想像以上に素晴らしいポスター会場となったと思う。ポスター発表による一般講演には176件もの応募があり、ポスター会場は大変盛況であった。3階教室にこんなに多数の人が入ったのは、今回が初めてだったかもしれない。本学から58件のポスター発表があった。多くの学部学生にとっては、今回の発表が、学外の先生方に自分の研究を説明する初めての経験である。今後につながるとても良い経験ができたと思う。本会においては昭和大学ならび薬学部同窓会よりご支援いただき、学部学生の学会参加に援助を行うことができた。この場をお借りして深く感謝申し上げたい。

ポスター会場での熱い討論はなかなか終わりにならなそうではあったが、18時から7号館に移動し、懇親会が開かれた(写真4)。山元俊憲・大会組織委員長の開会の辞に引き続き、来賓の片桐敬先生(昭和大学学長)、西島正弘先生(日本薬学会会頭)、堀江利治先生(日本薬学会関東支部長)にご挨拶いただき、大森栄先生(次期日本薬学会関東支部長)の乾杯の音頭で、懇親会は開始され

た。懇親会では、この場ならではの、薬系大学間の情報交換が行われたと思う。私も多くの旧知の友人たちと話すことができた。また、会の間には、関東支部奨励賞3名ならびに本大会優秀発表者賞10名の表彰が行われた。本学からは優秀発表者賞として、生理・病態学部門6年生の秋本和範君、生物化学部門研究生の野瀬冬樹君(歯学研究科大学院生)が表彰された。懇親会は盛況のもと、20

時頃終了した。

本支部大会の企画、運営には多くの学内の先生方にご協力いただいた。また、来賓の先生方も含め、本大会には758名もの方々にご参加いただいた。ランチョンセミナーの共催、要旨集への広告掲載をはじめご協賛いただいた企業の方々、本支部大会にご参加、ご協力いただいた多くの方々に、この場をお借りして感謝申し上げたい。



写真4 懇親会